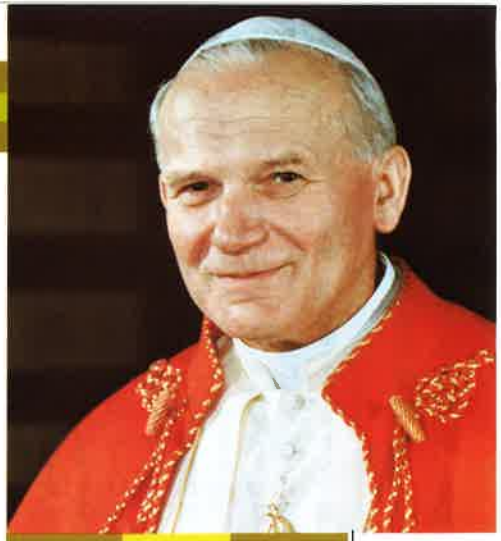
平成7年（1995年） 2月10日 教皇様の声 （昭和59年10月1日第三種郵便物認可）

2 FEBRUARY,1995 毎月10日発行 第178号



教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1995
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

愛と死

〈若者たち、これから家庭を築く人々、洗礼を受けた全ての人に。〉

キリストは呼び求める人にお答えになる

★（…）キリストに心を開きましょう。キリストの復活は、生命が死に勝つことを証明してくれました。その確信のもとに、私たちの人生は全力をあげて立ち向かうにふさわしい冒険となりました。ただし、神のご計画と救いのメッセージから注意をそらせてはなりません。「私のことばを守ればあなたたちはまことに私の弟子である。またあなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由な者とするだろう。」（ヨハネ8・31～32）

キリストにとどまりなさい。これこそ皆さん一人ひとりにとって何よりも大切なことです。キリストにとどまり、その声を聞き、教えに従うこと。そうすれば皆さんは真理を知り、自由になります。聖化してくれる愛と出会うでしょう。贖い主の人柄と教えに照らしてみれば、全てが新しい意味と価値を帯びてくるのです。

★さて、皆さんの中のある若い婚約者たちが問いかけた質問について考えてみたいと思います。支配的な消費文化に流されることなく、生命に開かれた愛の真の理由とその要請を深く究めるにはどうすればよいのでしょうか。

皆さん、愛とは単に自然的、あるいは本能的なものではありません。たえず確かめながら続けて行く、選択なのです。男女が真の愛で結ばれる時、二人は互いに相手の運命と将来を自らのものとします。それは困難な仕事で、苦しみを伴いますが、お互いに「命を、豊かな命を与えるため…」（ヨハネ10・10）なのです。イエズスのこの言葉は、まことの愛すべてに当てはまります。

このようにして初めて、軽い気持ちでもその場限りでもなく、「本気で」愛することができるのです。あなたが誰かに「愛しています」と言うなら、相手はその言葉が真実であることを知り、愛を「本気で」受け取ることでしょう。

イエズスのように愛さなければなりません。キリスト者が持つべき愛の最も深い理由は、キリストの言葉と模範にあります。「私が愛したようにあなたたちが互いに愛し合うこと。」（ヨハネ15・12）このことは、人間のあらゆる形の愛に当てはまります。婚約した二人の間の愛も、同じことです。結婚と家庭に向けて準備されつつある愛なのですから。

結婚に向けた愛は、新しい生命を生み出すための愛でもあります。この務めは神からの贈り物、人間に対する大いなる信頼のあかしであるとお考えください。

従って、子供は決して忌むべきもの、親から自由を取り上げるもの、時間やエネルギーや金を奪い取る侵入者ではありません。決して招かれざる客ではないのです。子供は神の祝福であって、夫婦間の利己主義を克服し、感謝と自由にする愛で現実を経験させてくれるものです。

日々復活するために死ぬ

★（…）ある人が死について質問してくれました。今度はそのことを考えてみましょう。

死を受け入れねばなりません。どんなに長生きしたところで、死は避けられないのです。でも死は終りではなく、自己の将来を決定する究極の行為です。こうして人生のどんな時でも、生と死を同時に経験することができるのです。

しかし私たち信者にとって、日日死ぬのは復活するためです。これは完全にキリスト教的な次元で言えることです。実際、キリスト者の経験の中心にあるのは十字架につけられた方です。死の神秘を通って復活の輝かしい道を開かれた方です。私たちが死ぬのは、復活するためです。

誰にとっても人生は大冒険です。それは十字架にかけられ復活したキリストの姿へと次第に変って行く道のりであり、洗礼を受けた日から始まっています。死を受け入れるとは、生命を余す所なく受け入れることと同じです。それはまた、多くの兄弟姉妹たちが飲み干している孤独と苦しみの杯を共に分かち合うことでもあります。こうした連帯によって死はもっと人間的に、生命はもっと真正なものになるでしょう。（…）

教会の教えをさらに深く知る

★聖パウロの言う十字架の知恵を学ぶことが肝心です。でもそれは、知的努力によってのみ身につけるものではなく、神との個人的なつき合いと対話によって養われてゆく知識です。神とは出会い、経験することのできる生命、従うべき真理、ちゅうちょなく受け入れるべき道です。

洗礼を受けた信者には、キリストと一致し、進んで福音を擁護し、広めることができるよう聖霊大いに期待している。」（十二・二十一）

●「母親が自分の子を殺していいのなら、私たちが互いに殺し合うことをどうして止められるだろうか。」（十二・二十三）

●「家庭は救いへの道です。」（十二・二十四）

●「女性は平和の教師となるよう招かれている。」（一・一）

●「神の恩寵によって、病もまた深い信仰体験と、無限の価値ある霊的な犠牲を捧げる礼拝に変わります。」（十二・一〇、ロレトへの司牧訪問で病人たちに向けて。世界病者の日の関連記事は4頁に。）

●「愛のみが若い二人に生涯を共に歩むべきことを教える。」（十二・十五、大学生へ）

●「教皇は子供たちの祈りに

教皇様の動き

の助けが与えられます。忘れないでください。生活全体で福音を告げ知らせねばなりません。福音とは「十字架にかかり、上げられた」キリストを宣言することです。こうして、日々のイエズスとの触れ合いの中で、「ユダヤ人にとってのつまずきであり、異邦人にとって愚かである」（Ⅰコリント1・23）十字架の知恵を学ぶことができるでしょう。

福音に従って生き、仕えたいという願いは、福音に親しみ、教会の教えをよく知ろうとする寛大で絶え間ない努力に結びついています。同時に現代文化の悪い点についても知っておかねばなりません。人間の尊厳を見くびり、気まぐれや本能、人格無視が横行している状況なのですから。（…）

恐れずに、キリストへの忠実を保とう

皆さんの言葉と行いで、主から「すでに聞いたこと」、学んだことを宣言してください。それは必ずしも容易ではありません。信仰に固くとどまり、福音の述べる真実を正面切って実行しようとするなら、時にはたいへんな勇気がいるでしょう。周囲から孤立する憂き目に会うかもしれません。けれどもキリストへの忠実を捨てないで。キリストが皆さんをお見捨てにならないことは確かですから。

皆さん、キリストは信実きわまりない友です。決して見捨てず、失望させることもありません。福音書にあるキリストの言葉は厳しく、難しいものですが、まことに真実に満ち満ちています。この真理が皆さんを自由にしてくれるでしょう。真理こそまことの友情の基礎です。「あなたたちは私の友である。もうしもべとは呼ばない。あなたたちを友と呼ぶ。」御父の秘義、測りがたい神の秘義をそっくり私たちに明かしたからです。私たちはキリストの十字架と復活によって封印されたこの秘義に歩み入り、キリストと共に分かち合うことを許されました。

十字架にかかり、上げられた友。今宵キリストがここ、私たちの目の前におられるように、その面影はいつも皆さんに付き添っています。十字架にかかり、上げられたキリストは、どんな時と状況でも、どんな試練の中にあっても常に皆さんと共におられます。「私はあなたたちを友と呼ぶ。」（…）

（九二・六・二〇）

司祭はキリストの司祭職にあずかる

教会シリーズ23

1

今回から、司祭と司祭職についてお話ししたいと思います。ご承知のとおり司祭は司教に最も近い協力者であり、聖別と司祭職の使命も司教と同じです。お話を続けるにあたってはこれまで通り新約のテキストに忠実に従い、第二バチカン公会議の取り組み方を踏襲するつもりです。私は司教団の身近な協力者である司祭への深い愛をもって、このテーマを展開したいと思います。一九七九年の聖木曜日に全世界の司祭宛てに書いた最初の手紙でも申し上げたように、教皇職登位の始めから私は司祭の皆さんに親愛感を抱き、主において愛しています。

2

まず指摘すべきは、司祭職はどの段階においても、すなわち司教も司祭の場合も共に、キリストの司祭職への参加であるということです。ヘブライ人への手紙によればキリストは新しい永遠の契約の「大司祭」であり、「ご自分を捧げて、一度で永久に」救いのわざの中心において無限の価値があり、変ることもとどまることもない犠牲を成し遂げられました。（ヘブライ7・24～28参照）唯一の仲介者キリスト以外にどんな祭司も必要ではなく、その可能性もありません。（ヘブライ9・15、ローマ5・15～19、Ⅰティモテオ2・5参照）　キリストは人類と神との和睦と一致の結び目であり（Ⅱコリント5・14～20参照）、「みことばは肉体となって、恩寵に満ちた方」（ヨハネ1・1～18参照）、メルキセデクの位に等しく永遠の司祭、大司祭であり（ヘブライ5・6、10・21）、地上では自らのいけにえによって罪を除き（同9・26）、天では信者のために常に取り次ぎを続け（同7・25）、自分が勝ち取り、約束なさった天の遺産をついには人々にも得させられるのです。新約で同じ意味の大司祭はキリスト以外にはありません。

使徒の協力者

3

キリストの唯一の司祭職への参与は、いくつかの段階に分かれて行使されるものですが、キリストがこれを制定された時、ご自分の教会での機能分化を望まれたのは、良く組織された社会の場合と同じで、指導の機能を果すために司祭職の役務者を制定されました。（「カトリック教会のカテキズム」1594番参照）　キリストは彼らに叙階の秘跡を授けて正式に司祭に任命し、キリストの名によって、キリストの権能をもって働き、いけにえを捧げ、罪を赦すようにされました。第二バチカン公会議によれば、「キリストは自分が父から派遣されたように使徒たちを派遣し、さらにこの使徒たちを通して、彼らの後継者である司教たちを自分の聖別と使命とに参与させた。そして司教の奉仕の任務は従属的段階において司祭たちに伝授された。こうして、司祭団の構成員となった司祭たちは、キリストから託された使徒的使命を正しく果すために、司教団の協力者となる。」（司祭の役務と生活に関する教令2番、「カトリック教会のカテキズム」1562番）

キリストにこういう意志があったことは福音書に明らかです。イエズスはペトロと十二人の弟子に教会の最高権威を与えると同時に、彼らの役務への協力者もお望みであったことがわかります。福音史家ルカの証言は意味深いものです。イエズスは十二人の弟子を宣教に派遣された後で（9・1～6参照）宣教のために十二人だけでは充分でないかのように、もっと多くの弟子たちを派遣されました。「その後、主は七十二人を別に指名し、御自ら行くはずの町や村にまず二人ずつお送りになった。」（ルカ10・1）

この措置はキリストが後日正式に制定されることになる宣教の役務の前触れであることは疑いありません。「ぶどう畑」へ相当数の協力者を送ろうとする神なる主の意図がすでにあらわれています。イエズスは、もっと大きな集団をなしている弟子たちの中から十二人をお選びになりました。（ルカ6・12、13参照）　ここで言う「弟子たち」は、福音書の意味するところでは、単にイエズスを信じるといった段階の者たちではなくて、もっとイエズスにつき従い、イエズスの教えを師の教えとして受け入れ、その事業に自らも献身したいと望む人々のことを意

※ご購読者の皆様へ
阪神大震災の影響で、2月号の発送が大幅に遅れましたことをお詫び申し上げます。

説教・講話・書簡等の抄訳

味します。そしてその人々をイエズスはご自分の使命にあずからせます。ルカによれば、まさにこういう場面でイエズスは次のように言われたのです。「収穫は多いが働く人は少ない。」（ルカ10・2）　最初の宣教での経験に照らして、働き人の数が少なすぎると思われたことがわかります。これは当時だけのことではなく、いつの時代も私たちの時代でも、問題が切迫している時にはまことにその通りなのです。急き立てられるようにして対処しなければならないのですが、同時にこれらの御言葉と、そして言わば穀物の収穫に働き人が要る畑に注がれるイエズスの眼差しによって慰められます。イエズスは自ら模範を示されましたが、それは「召命」促進と言ってもいいでしょう。イエズスは十二人の使徒に加えて七十二人の弟子をお遣わしになったのです。

4　福音書によれば、イエズスは七十二人に、十二使徒と同様の使命を与えられました。この弟子たちも神の国の到来を宣言するために派遣されたのです。弟子たちはこの宣教をキリストの名によって、キリストの権威をもって実行しました。「あなたたちの言うことを聞く人は私の言うことを聞く人であり、ちなたたちを拒む人は私を拒む人である。」（ルカ10・16）

司教と司祭の区別は初めの頃から

十二使徒と同様に（マルコ6・7、ルカ9・1参照）この弟子たちも汚れた霊を制する力を授けられました。それで、初めての経験の後で弟子たちはイエズスに言いました。「主よ、あなたの御名によれば、悪魔さえも私たちに服従します。」　この能力はイエズスご自身も確認されて、「私は天にひらめく稲妻のようにサタンが落ちるのを見た。私はへび、さそり、敵の全ての力を踏みつける力をあなたたちに授けたのだから…」（ルカ10・17～19）と仰せられました。

それはまた、この弟子たちが十二人と共に、新約唯一の司祭キリストの贖いのわざに参与することを意味し、十二使徒と同様に、この弟子たちにもキリストは使命と諸権能を付与することを望まれました。ですから司祭職の制定は、司教たちが協力者の必要を感じているという実際的な要請に応えるだけではなく、キリストの明白な意図から出たものなのです。

5　事実、キリスト教初期の時代にすでに司祭が存在しており、使徒たちの教会、またその後継者である最初の司教たちの教会で活動していたことがわかっています。（使徒行録11・30ほか、Ⅰティモテオ4・14ほか、ティト1・5、ヤコボ5・14、Ⅰペトロ5・1ほか、Ⅱヨハネ1、Ⅲヨハネ1参照）　これら新約の各書では「司祭」と「司教」の区別は、任された任務の点では必ずしも明瞭ではありませんが、ごく初期の頃からすでに使徒たちの教会でキリストの使命と司祭職への参与における二つの区分が形作られるようになりました。後になると使徒に準じる人々の著作で再びこの区別が見られ、しかも一層明白に記されています。（たとえば教皇聖クレメントのコリント人への手紙、アンティオキアの聖イグナツィオの書簡、ヘルマスの牧者など）　その後、エルサレムやローマの教会、その他の東西の地方教会での共通用語として、司教という語は最終的に、その教会共同社会の頭であり牧者であるただ一人のみを指すものとされ、他方、司祭という語は司教に従属して働く牧者を指すようになっています。

叙階の秘跡によって与えられる聖別と、聖化の力を考えれば、司祭の役務は単に正義と愛を広める仕事のみにとどまりません。司教と同じく司祭もキリストの司祭職に参与する、聖別された「聖なる人」であり、真理と神の恩寵の分配者なのです。

6　キリスト教の伝統に従い、新約聖書で証されているキリストの意志に合わせて、第二バチカン公会議は「司祭は司教職の頂点を持たず、自分の権能の行使において司教に従属している」と述べています。他方、司祭は「司祭の栄位において」司教に結ばれています。（教会憲章28番、「カトリック教会のカテキズム」1594番参照）　この結び付きは叙階の秘跡に基づくものです。「司教団に結ばれている司祭の務めは、キリスト自身がその『からだ』を建設し、聖化し、統治する権威に参与するものである。」（司祭の役務と生活に関する教令2番、「カテキズム」1563番参照）　司祭も「最高永遠の司祭であるキリストにかたどられて」（教会憲章28番）いるので、キリストの牧者としての権威に参与します。これは司祭の役務の特色で、授けられた叙階の秘跡に基づきます。司祭の役務と生活に関する教令では、「したがって、司祭の司祭職はキリスト教入信の諸秘跡を前提とするが、別個の秘跡によって授与されるものである。この秘跡は、聖霊の塗油によって特別な霊印を司祭にしるし、こうして司祭は『かしら』であるキリストの代理者として行動できるように、司祭キリストの姿に似たものとなる。」（司祭の役務と生活に関する教令2番、「カテキズム」1563番）

司祭の役務と恩寵

聖霊の秘跡的塗油を授かった人にとってはこの霊印は特別な奉献のしるしであり、洗礼や堅信との関係から見れば、神への公的な礼拝と兄弟姉妹たちの聖化のうちに司祭をご自分の積極的な役務者に変える大司祭キリストとのさらに深い一致であり、教会の頭・牧者であるキリストの名において行使すべき権能でもあります。（「カテキズム」1581～1584参照）

7　司祭の霊魂に刻みつけられるこの霊印は、役務を遂行するための特別な恩寵、つまり聖なる叙階の秘跡が授けられる時も役務の行使と成長の過程を通じても与えられる、成聖の恩寵に結び付いた恩寵のしるしであり、媒体です。牧者たちの様々な活動の中で、役務とはそれを行使する者とそれによって恩恵を受ける者にとって聖化の営みを意味します。全教会が司祭の役務による聖化の実りを収穫します。教区司祭、それに資格や形式を問わず聖なる叙階を受けた人々は、共に教区の司教及びペトロの後継者と一心同体で活動を続けるのです。

8　叙階を受けた人の存在そのものに影響を与える聖別と、それに伴う聖化の力を考えれば、司祭が単に世の中に正義を打ち立て、愛を広めるだけのものであるかのように考えることはできません。司祭はキリストの司祭職に、自分の存在の根底から参与します。司祭は真に聖別された「聖なる人」であり、キリストと同様、父なる神への礼拝と宣教の使命に任命されて、真理と神の恩寵という聖なる現実を兄弟姉妹に広め、分配します。これが司祭の真の独自性、本分であり、今日の司祭の役務にとって本質的な要件でもあります。（九三・三・三一）

不変の教え

苦しみは十字架の力を告げる

（…）世界のあちこちで戦乱のため人々が血を流している現在、また「深刻に人間の悪化を促す病める文明」（『家庭への手紙』20番）の支配する現在、「世界病者の日」の制定は大きな意味を持っていると思われます。

95年世界病者の日の記念式典はアフリカのコートジボアールで開催されますが、これはたいへん意義深いことです。苦しみと平和との間には深い関係があります。平和のないところでは苦しみが広がり、死が人々の間で猛威をふるい、社会でも家族の間でも人は穏やかに理解し合うことをやめ、生命への攻撃が激しさを増すのです。

残念ながらいまだ平和への道のりは遠く困難ですが、福音に心を開く人なら、赦しと和解の必要を訴え続けて倦むことはないでしょう。私たちは世界中の病人たちと共に日々熱心に祈り、苦しみという捧げものを捧げるよう招かれています。キリストも人類の贖いと救いのために苦しみを手段として用いられたのです。

平和の源は私たち皆を救うキリストの十字架です。キリストに一致し（コロサイ1・24参照）キリストのように苦しむことを求められているキリスト信者は、受け入れた苦しみをお捧げし、すばらしい十字架の力を世に知らしめます。暴力と罪が争いと分裂を生むのに対し、正義と愛の実りは平和であり、その頂点は自らの苦しみを寛大に捧げること、必要とあらばキリストのように生命までも差し出すことです。「…教会は世の救いのために、人間の苦しみの価値にますます頼らざるを得なくなっています。」（『苦しみのキリスト教的意味』27番）

苦しみを有効に用い、世の救いのために捧げることは、それ自体が平和をもたらし、広める行為です。弱者、病人、苦しむ人々の勇気ある証しは、平和をもたらします。実際、苦しみは深い霊的な交わりに目を開かせ、人生の真の価値に気づかせ、こうしてこの世に平和をもたらすための努力を後押しするのです。

キリストを信じる人は、キリストの苦しみに一致することによって、真の平和のための働き人となることを知っています。それは計り知れない秘義ではありますが、教会の歴史、なかんずく聖人たちの生涯において目にも明らかな実りをもたらしました。死に至る苦しみがあるなら、また神のご計画によって、改心と悔い改めに導く苦しみも（Ⅰコリント7・10参照）あります。それは自分の体をもって「キリストの苦しみの欠けた所を満たす」（コロサイ1・24参照）ことであり、喜びの理由、源となって生命と平和をもたらすものです。　身も心も苦しんでいる兄弟姉妹の皆さん、神の呼びかけに気づき、受け入れてくださるよう願っています。皆さんは苦しみを通して平和のための働き人となるよう召されたのです。このような呼びかけに応えるのは容易なことではありませんが、常に信頼を込めて「苦しむしもべ」イエズスを見つめ、皆さんを苦しめている試練を賜に変える力を求めましょう。「労苦する人、重荷をおう人はすべて私のもとに来るがよい。私はあなたたちを休ませよう」（マテオ11・28）という主のみ声を聞きながら。　処女マリア、悲しみの御母、平和の元后よ。世界が切に求めている確固たる信仰を、全ての信者にお与えください。弱い者、力ない者たちの捧げる犠牲が、贖い主キリストの過越の神秘と一緒になって、悪、憎しみ、不和の力を消し去ることでしょう。

医師、看護婦、そして病人を助ける有志の方々に一言。世話を委ねられた人々に心から愛を注ぎ、信者として、病人の内におられるキリストご自身を称えることができるなら、皆さんの働きは真の証し、具体的な平和の行為となるのです。（…）（九四・十一・二一）

聖母はやもめ暮らしを知っておられた

愛する皆さん。

サラエボ、またボスニア・ヘルツェゴビナの各地からお集まりになった皆さんとこうしてお会いできることをたいへん嬉しく思います。教皇はサラエボや皆さんのお国へ行くことができませんでしたが、皆さんが教皇のもとへ来てくださいました。こうして私たちはここロレトの聖家族の家で、マリアの前に集まっています。私は皆さんの一人ひとりを心からお迎えし、皆さんの苦難とご家族・同胞の人々への同情の念を表明いたします。

今、私たちはナザレトの聖家族に思いを馳せます。実に心惹かれるものがあります。聖家族はあらゆる家庭、皆さんの家庭の状況をも映す鏡なのです。事実、福音書からわかるのは聖マリアも未亡人の境遇を経験しておられたことです。イエズスが十二歳の時の神殿での出来事を最後に、夫ヨセフへの言及はありません。そこで、マリアの体験と信仰について黙想してみましょう。マリアは夫の死後イエズスと共に残り、祈りのうちにイエズスにつき添い、公生活の間はカルワリオの受難に至るまで彼に従い、ついに十字架のもとでその死と贖いに結ばれることとなりました。マリアはイエズスの母であると同時に、最も忠実な弟子でもあったのです。

今もマリアは何らかの方法で、イエズスの弟子としての自らの経験を未亡人という困難な境遇にある皆さんにも伝えたいと願っておられます。愛する皆さん。信仰の光に照らしてみれば、皆さんの状況は教会にとって、またこの世での教会の生活と使命にとって、計り知れない宝です。とりわけ妻や母である皆さんの、戦争のため夫や時には子供たちを奪われるという犠牲が、神の御目には大きな重要性を持っています。それらはキリストの犠牲と一緒になって平和の恵みを人類にもたらすことでしょう。世が与えることのできないその恵みを、主イエズスは来たるべき天の国の約束として私たちに残してくださいました。

愛する皆さん、おいでくださりありがとうございます。主の報いがありますように。常にマリアが傍らにあって皆さんを助け、困難と試練に耐えることができますように。天に宝を積み、永遠の故郷で愛する人々と共に、とこしえの平和を楽しむ日を希望しつつ。

私の愛と祝福を送ります。イエズスとマリアに誉れあらんことを！（イタリアのロレトで、未亡人たちへ。九四・十二・十）

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料七百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
01130-
8-72393